

キプリングの変装

— 『キム』論 —

辻 建 一

1. 強者とキプリング

植民地支配に反抗するネイティブも、男の牛耳る世界に意義をとなえる女性も出てこない『キム』は、中流の白人男性として自分を大英帝国と一体化しようとする作家が、帝国の権力に抛りかかり傲岸な態度でインドを表象してみせたテキストなのであろうか。いや、R.キプリングの場合、作家という社会的立場を持つ自分が帝国といかなる関係を取り結ぼうとしているのかという問題は、彼のキャリアの特殊性を考えるとそう単純に説明のつくものではなさそうである。インドで生まれ支配者側の一家の長男として現地の召使にかしづかれて過ごした6年の後、イギリスに行ってから余所者として叔母に虐待を受け、それから帝国を将来担っていく人材を養う学校ユナイテッド・サーヴィシズ・カレッジで学生時代を過ごし、そしてまたインドに渡ってアングロ・インディアン側の側からインドを何年も取材し続けたというキプリングの生い立ちを考えた場合、支配者—被支配者、あるいは強者—弱者という図式の中で自分がどのような立場にいるのかという問題が、その都度様相を変えて彼につきまとったことは想像に難くない。特に、帝国のマスキュリンな価値基準の世界に生きながらも彼自身は近視で背の低い運動嫌いの受動的なタイプであっただけに、その立場は一層微妙なものになったであろうことも容易に予想がつく。

興味深いことに、前期のキプリングの小説では、作者の作中におけるポジションがしばしばはっきりしており、またそのことが、作品を書くことによって作者が強者とどのような関係を持とうとしているかという問題と結びついていることが多い。ここでいう強者とは、もちろん一つには大英帝国のことであり、また、大英帝国を担っていけるような戦略に優れて行動力のある人物達のことである。

まず、20歳前後に書かれたインドを舞台にした短編集『高原平話集』では、作者は本のタイトルが示す通り全てを見渡せる高原の高見に立って、平地の登場人物達の繰り広げる愛憎劇を悠然と見下ろしている。そしてよく使われる表現を用いれば、しばしば「訳知り顔」で人生の教訓をたれている。人生についてそして男女関係の問題についてしたり顔に語り、インドの風習を紹介するキプリングは、人生の諸相の観察者としての力をアピールし、また、インドの情報提供者として帝国に貢献することになる。

キプリング25歳の時の長編小説、画家ディックと画家を志す女性メイジーの恋物語が描かれる『消えた灯』は、F.ガラードとの失恋の痛手に終止符を打つために書かれたものと言われ、主人公ディックはほぼキプリングの分身だと見られている。それゆえ『高原平話集』とはうってかわって、作者に男女間の悲喜劇を高見に立って見晴らすといった余裕はなく、自身の苦い思い出や感情が色々な場面ににじみでている。『消えた灯』は、自分について語ることの少なかったキプリングにしては「異常なくらい直接的に作者の心と気質を現している」¹⁹⁾ 作品であり、ディックの口からはキプリング自身の考え方と思われるものが多く表されている。

キプリングの芸術の変化、発展との関連において注目したいのは、『消えた灯』の中に見られる芸術に対するディックの考え方である。ディックは、初めは自分自身の筆で世界に影響を及ぼすことができると信じ、芸術を世界を征服するための手段とすら見なしていた時期があったと述べている²⁰⁾。それをキプリング自身に当てはめてみれば、『高原平話集』を書いていた20歳前後の頃のキプリングは、インドを表象してみせさらに人生の教訓を与えてみせるという作業によって、世間に向かって大いに力を揮おうという意欲が旺盛だったのではないかと推測できる。

24歳でロンドンの文学界に登場したキプリングに対

応するように、画家としてある程度の名声を上げロンドンに戻ってきたディックは、個人の欲を離れた純粋な創造の喜びに飲み込まれてこそ本物の芸術作品が生まれるという考えを持つようになる⁹³。それはキプリングが中期以降技巧に凝った作品を書くようになることを暗示するようなディックの芸術観の変化である。だがディックは、世俗での成功へのこだわりを捨てきれず、いわば自ら強者になろうと無理をして破滅への道を歩んでいってしまう。

1899年に出版された、ユナイテッド・サーヴィシズ・カレッジ時代の経験を踏まえて書かれている『ストーリーと仲間たち』には、見た目は冴えなくて度胸もないのに皆から尊重されているビートルというキャラクターが登場しているが、その人物像はまさに学校時代のキプリングの姿を彷彿とさせる⁹⁴。行動力や勇気の点で他の人より劣るビートルは、観察、記録という自分の得意とする手段で仲間たちの活躍に貢献する。同じようにキプリングの分身的存在といっても、しばしば荒々しいやり方で自ら力を行使しようとする『消えた灯』のディックとは違い、ビートルは観察者、記録者として強者に協力という手段を選ぶ。

このように、作者の作中におけるポジション及び作者の強者との関わり方、という単純な切り口がかなり有効な前期の小説とは対照的に、キプリングの中期以降の短編には多義的で曖昧な作品が多くなり、作者のポジションのみならずそのテーマすら捉えるのが難しくなっている。隠蔽と韜晦の芸術の中で作者はどこかに身をひそめてしまい、作者と強者との関わりという単純な視点も無効にならざるをえない。特に、1904年の『交通と発見』に収録されている短編などからそういう傾向が強くなっている。そしてキプリングは、インドについての情報通、帝国の擁護者という顔以外に、モダニズム芸術の先駆者としての顔も持つようになっていく。

『キム』は、時期的に『高原平話集』から『ストーリーと仲間たち』に到る作品群と『交通と発見』以降の作品群との中間に位置している。『キム』では、作者はどこに身を置いているのだろうか。もし『キム』の中での作者のポジションを見極めることができたなら、作家としてキプリングはどのように大英帝国と関わっていたのか、という問題、さらに、『キム』以降作者の姿が見えなくなっていった問題についても貴重な手掛かりが得られるかもしれない。

* * *

E. サイドは、『キム』に出てくる登場人物のうち、大英帝国側の制度内の人物で、対ロシア戦略の大ゲームを具体的に司っているクライトンに、キプリング自身の立場との近似点を見出している。

キプリングに帰せられるべき変わらぬ観点があるとすれば、テキストの中では他の誰よりもクライトンの中にこそそれが見られる。…キプリングと同様、クライトンはインド社会内部における差異を尊重している⁹⁵。

クライトンは、19世紀後半のイギリスの植民地支配の有り方の一面を表す人物、つまり、帝国が支配する異国の文化を暴力的に破壊しつくすことを回避し、異文化を保存する役割を担おうとする民族学者である⁹⁶。そういうオリエンタリスト、クライトンを、キプリングの立場と最も近いとするサイドの見解に従えば、キプリングによるインドの詳細な描写は、やはり結局は帝国への異文化報告という意味合いが強くなってしまっただろう。このテキストには、東洋のあらゆる特質を熟知していると言わんばかりに、「東洋流の**」「東洋に特有の**」「東洋の風習にしたがって**」といった類の性質規定の言い回しが夥しく出てくるという事実からも、サイドの見方は裏書きされるように思われる。

キプリング以前に活躍していた人気冒険小説家達、R.L. スティーヴンソン、G.A. ヘンティ、R. ハガード、R.M. バランタインなどは、主人公の胸躍するような冒険とともに、主人公が活躍する異郷の地の風景や習俗も詳細に描きこむことが多い。19世紀イギリス冒険小説は、帝国の一員である英雄の活躍を賞揚するだけでなく、帝国の少年達に異国についての知識を授けるという教育効果をもつことにより、帝国のエートス鼓舞に一役買っていた。『キム』は、異国で大活躍する帝国のヒーローが、そして、異郷の地の風景、人々、習俗が描き込まれているという点で、それまでの冒険小説と軌を一にしている。

しかし、生まれてからの数年をそして初めて仕事についた17歳からの数年をインドに密着して暮らしていたキプリングの異国描写は、他の冒険小説家達以上に、作家のその土地への感情的コミットメントの度合いが強いことも事実である。色々な階層の人物達、土地特有の建物・装飾品・食べ物・行事、そして目も眩むよう

な北方の自然の光景などの、豊かで多彩なインドのパノラマ的描写を読むと、『キム』を書いている時のキプリングの心は、幼い頃のノスタルジックな思い出と、青年時代のジャーナリスト生活で得たインドについての膨大な知識とが合流して送り、インドへの愛着が大英帝国への忠誠をはるかに圧倒しているのではないかという印象すら受ける。

しかしサイドは、この小説が思う存分自由にインドを描ききろうとしていること自体が、その前提に大英帝国による永遠に絶対的なインド支配という作家の幻想がなければそもそも不可能なものであるとしている。そしてサイドは、当時のインドを舞台にするのなら本来問題にしなければならないはずのインドとイギリスの葛藤が『キム』においては全く欠如していることを指摘し、その根本的理由をキプリングがインドを「帝国主義の不幸な犠牲者」と見做していなかったためであるとして、帝国のイデオロギーというキプリングのお馴染みの肩書きを承認している⁹⁾。

サイドの論を意識してZ.T.サリバンは、全編に溢れている、聖河探究を行う気高いチベット僧ラマに対するキムの無償の愛が、ラマの価値を認めようとしなない帝国のイデオロギーを否定しているように見ると述べ、『キム』には政治的葛藤は確かに欠けているが、ラマ及びインドに対する欲望のディスコースは植民地主義のイデオロギーに対立していると論じている¹⁰⁾。サリバンに限らず、『キム』のインド描写が東洋を帝国主義の傲慢な眼差しの中に収めようという姿勢につきるわけではないという立場をとる批評家は、ほぼ例外なく、キムとラマの友愛あふれる関係をその主な根拠に置いている¹¹⁾。それゆえ、『キム』においてキプリングが、メタレベルに立ってエキゾチックなインドを睥睨しているだけではないという可能性をさぐるには、キムとラマの関係を改めて検討することが必要となる。

2. キムとラマの関係

ラマの宗教的真理探究の物語は、帝国の先兵キムの冒険物語とはまるで次元の異なるようなものに見えるが、しかしそのラマも後半では結局、クライトンの元で働くキムの活動の隠れ蓑、つまり帝国の作戦の一つの道具として利用されていく。また、最後のラマの聖河探究成就の場面では、実際には小川に溺れかかっているだけのラマの様子を周囲のものは皆冷やかに見ている。ラマを馬鹿にしようとする人にいつもくっつか

かっていたキムにさえも「慈悲深きアラーの神よ!あぁ、全くインド紳士が近くに来てくれてよかったよ!お前さんはずぶ濡れになったのかね?」(338)¹²⁾とあきれられる始末で、現実レベルではラマは全く無力で滑稽な存在となってしまうのだ。

サリバンは、キプリングが『キム』のインド描写において「インドの社会的政治的複雑さを、次々とイギリス人の管理人によって管理されている博物館によって示されている精妙な無時間的イメージへと還元していく」¹³⁾と述べている。実際ラマについても、物語の大枠だけを見れば、博物館に収められるように運命づけられている、東洋の新奇の珍品という程度の存在のようにも読めてしまうのである。

ラマはまず最初に、土地のことは何でも心得ていたつもりのキムの目に、自分のそれまで持っていた分類枠の中に収まらない人物として登場する。

●角を曲がって一人の人間が現れ出てきたのだったが、それがどんな階級でもピンからキリまで心得ているつもりのキムにも、まだ出くわしたことのないような人間だった。●キムにはどんな商売とも職業とも見当がつかなかった。(52)

●●ラマは全く珍しい人間だったので、もっとよく調べてみたかった——ラホール市の新しい建物とか奇妙なお祭行事を調べてみようとするのと同じ気持ちだった。ラマはキムの発見物だった。だから彼はそれを確保しようとしたわけだ。(60)

そして最後にラマは、キムの視点から博物館の仏像に譬えられている。あたかも、ラホール博物館に収納されている数々の珍しい品物に、キプリングがキムを通してラマという珍しい発見物を「確保」し追加していくことが、この物語の骨子であることを裏付けているかのように。

淡黄色の光を背に漆黒に浮かび出た結跏趺坐の姿を、キムは透かし見た。それはあのラホールの博物館に、特許自動記録式回転扉を見下ろしながら端坐している石像の菩薩のような姿だった。(336)

いわば新規の発見物であるラマを帝国の博物館に陳列することによって、地球上で発見されるものを次々と可視化していこうとする帝国の文化事業にキプリングも一役買っていると解釈するとしたら、『キム』は西洋

から見た神祕の東洋というイメージを、ラマをその象徴としながら強化しているだけのテキストということになってしまいかねない。

しかし、ラマに対する作者の見方は、果してそのような醒めたものなのであろうか。キムをはじめ多くの登場人物に愛されたり好奇心をもたれたりするラマ。またキムの多額の教育費を事もなげに送ってくるなど、イギリス側から見れば驚異的な能力を時々発揮するラマ。そういうラマとキムとの間に単純な優劣関係がつけられているとは断定できない。

もし『キム』が、単なる大英帝国の拡張を背景にした冒険物語だとしたら、キプリングが、キムとラマの関係を、イギリス・インドの支配・従属関係を繰り返すために造形していると言うことも可能かもしれない。しかし、『キム』は19世紀的冒険物語の枠に単純に収まりきるものではなく、それどころか、諸ジャンルの要素のダイナミックな混淆こそ『キム』の一つの大きな特徴である。予言の成就のような「ロマンス」の常套手段を含んでおり、ラマの聖河探究がテーマである「探究小説」の色彩も強く、そしてまた、イギリスとロシアの情報合戦が行われることから「スパイ小説」の先駆けと言ってもおかしくはないだろう。

しかしキムに関して言えば、権力によりかかることなくむしろそれははぐらかしながら世の中の色々なシーンを転々と渡っていくその行動パターンからして、「ピカレスク」のヒーローという呼称が最もふさわしい。そしてキムとラマという全く異質な二人のキャラクターのコンビが違和感なく読者に受け入れられるのは、キムのキャラクターに相応するくらいにラマのキャラクターも現実離れしており、二人の旅路に現実をベースにした冒険物語を超えた次元が付与されているからであろう。ドンキホーテとサンチョパンサのように一緒に珍道中を繰り広げるラマとキムは、帝国の対ロシア戦略という物語の現実レベルでの進行とは異なる次元、つまり、ピカレスクの虚構性の強い空間に投げ込まれている存在でもある。そのことを考慮に入れながら、キムとラマの関係についてまた別の角度から辿っていけばその優劣関係が逆転しているようにさえ読めるのだ。

* * *

キムがまず最初に驚嘆するラマの特質は、ラマが正直なことのみに言い、嘘や変装という手管には全く関心を示さないということである。

「キムはびっくりして立っていた。博物館で語られていたことに聞き耳をたてていた彼には、この老人が真実を話しているのが分かったからだ。そして道の人に真実を話すというようなことは、インド人にはめったにない事だった。(64)

『キム』では、情報操作、作り話、芝居などの技術に、人の強さが全てかかっているという見解が、語り手によって、そして色々なキャラクターの口を通して頻繁に示される。インドに関する情報通キプリングを信用すると、インドにおいて活躍しようとする際肝に命じておかなければならないのは、本当のことは決して漏らさず情報をいかに自分の得になるように利用するか、ということである。ところが「本当のことばかり話す爺さん」(65)ラマは、現実世界での力の獲得の欲望は全く捨てている。何よりもその点においてラマはキムにとってインドで未知の存在であった。

世俗のあらゆるものに関心を示すキムに対して、世俗的価値には一切無関心であるラマの間には、そのような明白な対照関係があるとともに、そのことがまた重要な共通点とつながっていることも見逃せない。キムはもともと、いかなるカテゴリーにも属さない状態を追求しているという意味においてはラマと同工異曲なのである。ラマは人種、階級、言語の区別を全て超えた境地に立とうとし、キムの方は人種、階級、言語を自在に操り、どんな経験もゲーム的意識でもって楽しむ。ラマとキムの二人は、あらゆる境界線から自由な状態で生きているその超越性のために、物語の中で特権的な位置を占めている。日常を超越した二人のピカレスクの旅路がまさに読者にアピールするのだ。

しかし、キムの方はやがてカテゴライズされていく運命にある。キムは、インドの自然、カオスから、イギリスの規律、秩序の世界への移行を強いられ、またキム自身途中からそのことを自覚している。

自分が一個の白人であり、やがて試験にパスした暁にはインド人を支配するものであることを、断じて忘却してはならないのだった。試験というものが導いていく行く手をだんだん理解しはじめたキムは、そのことを心に銘記した。(173)

キムは自分のアイデンティティについて考えるようになり、白人であるという事実にも次第にこだわりを持

つようになる。それに対してラマはあくまでもどんなカテゴリゼーションにも関心を示さない。キムが「..そしておれは白人なんだ」(261)と言うと、ラマは「..妙道に精進する者たちには、黒も白もなければインドも西藏もない。皆解脱を求める魂なのじゃ」(261)と答える。二人の間にズレが生じていることは明らかである。

カテゴリーに縛られないことで特別な存在だった二人のうち、キムはその特権を失いつつある。他の全ての人と異なりどの世俗のカテゴリーからも自由であるという点においては、ラマの方がキムよりも優位に立つことになる。キムはいわばピカレスクのヒーローから現実的な冒険物語のヒーローへと降りてくる。

あらゆる境界線を自在に跨ぎながら遊戯的に世の中を渡っていたキムがイギリス制度の下の大ゲームに入っていくと同時に、この小説はキムのアイデンティティ探究の物語という色合いを濃くしていく。「..白人になっちゃったんだ。彼は悲しげに自分の長靴を見やった——いやおれはキムだ。この世の中は広いし、おれはただのキムなんだ。キムというのは誰だ？」(166)「—巨大な不可思議な世界—そしておれはキム—キム—キム—ただ一人—一個の人間として—この全ての直中にいる。」(273)「おれはキムだ。おれはキムだ。そしてキムとは何だ？」(331)ここでおさえておかなければならないのは、キムがどこか哀しげにアイデンティティの自問自答を繰り返す間、キムのラマに対する愛情の持ち方に変化が見られることである。

..キムは、これまで理由もなく彼(ラマ)を愛していたのだが、今は多くの理由をもって彼(ラマ)を愛するようになった。(262)

カテゴライズされていく自分と、あくまでもカテゴライズされないラマとの間に距離が生じることによって、キムの眼にラマの姿が最初と違う風に見える。最初は単なる珍しい発見物としてラマを扱っていたキムが、イギリス側に組み入れられていく運命に従うにつれて、そしてアイデンティティの問題に直面するにつれて、ラマを愛することに「多くの理由」を持つようになっていく。つまり後半キムが俗世を超えた真理を追究しているラマの価値により意識的になっていくことによって、キムのアイデンティティ探究のテーマとラマの宗教的真理探究のテーマがリンクしてくる可能性が出てくるのだ。

しかしながら、キムがラマを敬愛するその具体的な

理由が明確にされることはなく、そして結局、キムのアイデンティティ探究の物語とラマの聖河探究の物語はかみあわないうまま終わりに到る。では、ただの発見物という存在から次第に格上げされてくるように思われるラマの意味づけを、作者が放棄してしまっているのだろうか。

多くの批評家が、二人の世界がズレたまま終りに至ることを指摘しているが、その結末のあけなさにについては、異なる価値観の葛藤の回避、つまり、問題含みの状況を設定しながらその解決をうやむやにってしまう作家の無責任に帰せられがちだ¹²⁾。しかし小説の中で提示される二つの世界、ラマとキムの世界の乖離について、キプリングがとらえにくい巧妙なやり方で対処しているという可能性も否定できない。実は、キプリングはラマを現実から遊離した世界に一人置き去りにすることを避けるために、ラマを敬愛すべき真の理由を追究するという役割のある特異なキャラクターに託しているように見える。後半キムが白人にカテゴライズされていくとともに怪しげに出没し始める「不格好に太ったインド紳士」(207)ハリー・バブこそその人物であり、彼は現実の世界と非現実の世界に分かれていくキムとラマの間に入って、いわば二人を架橋するような存在になっている。

3. ハリー・バブの役割

帝国のインド調査局にR・17と登録されているベンガル紳士ハリー・バブは、ハーバート・スペンサーの信奉者であることを公言し、時々シェイクスピアを引用し、そしてキムにワーズワースを読むことを薦めたりする教養人である¹³⁾。キムはラマに常に愛情を注ぎ、ラマを軽く扱おうとする人達にラマが立派な人だということを喧伝するが、ハリー・バブのラマに対する尊重の方が、キムのラマに対する愛情よりも、より深い洞察があるように書かれている。

ラマのそういう見解に対して、ハリー君は愛嬌あふれるばかりの慇懃さで同調したので、ラマは彼のことを礼儀正しいお医者さんと呼んだ。それに応じてハリー君は、自分は神秘というものについてはちょっとかじった程度の素人にすぎないが、少なくとも——神々様のお恵みによって——巨匠の前に座を占めればそれが感得できる。自分はカルカッタの豪華な学堂で、経費を事もせぬ白人達の

教えを受けた。しかし何としてもまず、俗世的な知恵の背後に一つの知恵、すなわち孤高の禪学が横たわっていることを、確認しないわけにはいかなかった。そんな風にいう彼を、キムは羨望の気持ちで見守った。キムの知っているハリ－君——お世辞がうまく、熱弁をふるい、そわそわ落ち着かないハリ－君は消え失せ、昨夜の鉄面皮の薬売りも消え失せて、そこには——洗練されて慎ましくじっと注意深く——体験と逆境を経て、真面目な学識のある人間が、ラマの口から知恵を吸収していた。(275)

この物語には、マハバブ・アリ、ヴィクター神父、ラーガン、クライトンと、キムを指導する人物が次々と登場し、孤児であるキムにとっての父親代わりのそういった人物達に、キムもそれなりの敬意を払っている。しかしキムが上の場面のような「羨望の気持ち」を表している相手はハリ－・バブだけである。何故か？それは、ラマが体現する神秘的な知恵を追究する能力が、キムではなくハリ－・バブに与えられているからだ。ハリ－・バブは「人種学の草稿を纏めて王立学術協会の会員になろうと望んでいる」(204)が、上に見られる彼の東洋研究は、同じ希望を持つクライトンがそうであるような、異郷の風物を透明な分類学的秩序のうちに収めようとする合理的な精神ではなく、「俗世的な知恵の背後」にある神秘的なものを誠心誠意吸収しようとする姿勢なのである。ハリ－・バブのラマに対する向き合い方は、単に愛情や好奇心でもってラマと接する他の人物達とは明らかに異なっている。

さらにハリ－・バブは、キムが自分が誰にも負けないつもりでいた変装や芝居という手管をキム以上に見事に使い、ロシア側とのつばぜりあいを制する際に最も大きな役割を果たす。

「あの男は彼らから奪い取った」とキムは自分の果たした役割などは忘れながら考えめぐらした。「あの男は彼らをペテンにかけた。彼らにベンガル人らしく嘘をついた。彼らはあの男に証明書を与えた。あの男は命を賭けて、彼らを愚弄したので——おれだったら、拳銃の弾丸が飛んだあとで、彼らのところへ降りて行くなるとても出来なかったろう」(330-331)

ここでキムがハリ－・バブの行動を描写する際に使って

いる「ペテン」「嘘」「愚弄」というのは、この物語では世俗で活躍するための不可欠の要素とされておりそしてキムが自家薬籠中のものとしていた手管であった。ところがそれをハリ－・バブはキム以上に発揮し、キムをすっかり感心させている。マハバブ・アリとともに白人を「その阿呆さかげんは天井知らずの底知らず」(220)としばしば馬鹿にしているキムは、帝国の人達よりもこのベンガル紳士の方を、はるかに高く評価している。

ところがここで問題となるのは、一般にはベンガル紳士はアングロインディアンの社会では貶められ極めて否定的に捉えられていたということである。L.D.ウルガフトが指摘するように「体力面と精神面の両方におけるイギリス人の強さとベンガル人の弱さの対照は、アングロインディアンの文学、政治のディスコースにおける最もお決まりのテーマの一つ」¹⁴⁴であった。そしてキプリングももちろんそのディスコースになじんでいた。実は、ハリ－・バブは「キプリングがインドについて書いたものの中で唯一肯定的な描かれ方をしているベンガル紳士」¹⁴⁵であり、それゆえこの人物の特異性には特に注目しなければならないのである。

キプリングがハリ－・バブのような典型的なベンガル人をあえて肯定的に描いているのは、ベンガル人もこのハリ－・バブのように帝国に全面的に協力するのなら好意をもって扱ってあげようという傲岸な態度の現れととる見方もあるかもしれない。しかし、ハリ－・バブが他のどの登場人物よりも、キムとラマのそれぞれに重要な関わりを持つことを重視して検討すれば、ハリ－・バブの存在意義についてもっと肯定的な他の可能性も浮かび上がってくるはずである。

『キム』にもベンガル人を軽んじる価値観はあちこちに現れている。例えば、『高原平話集』に既に出ていたリズベスという女性が『キム』で年をとった姿で再登場しているのだが、そのリズベスとキムの会話でハリ－・バブのことが話題になっており、インド人の中でもベンガル人のイメージは極めて悪かったことが示唆されている。

「あのインド紳士は白人達に嘘八百を吹きまくっているけど、どうしてぼったかしにして行っちゃまわらないのさ。」

「あの人の心が大きいからさ」

「ベンガル人なんて、ひからびた胡桃ほどの心も持っていたものはいないよ。」(311-312)

ハリー・バブ自身「自分は臆病な男だ」という言葉を連発しており、さらに、その恥ずべき性質をベンガル人であることと結び付けている。「それにまた、僕はベンガル人で臆病な男だしな」(272)「自分は臆病な男で・・」(317)「何しろ僕は、臆病な男なんて、責任というものを好まないんでね。」(329)ここで気に留めたいのは、他にこのように自己定義を執拗に繰り返している人物はこの小説にはいないということ、そしてその自己定義は実はキプリング自身のものではないかと思われることである。多くの評者が指摘するように「キプリングは勇氣ある人物とはとてもいえなかった。」¹⁶⁾

そしてキプリングは見てくれは冴えないハリー・バブを実は中身のある優れた人物として造形しているが、そのハリー・バブの優秀さのきたる所以を、彼が数多くの苦難を経験してきた人物であるところに据えている。

「僕は臆病な男さ——臆病の骨頂さ——しかし嘘も隠しもなく、僕が窮地に陥ってきた数は、僕の髪
の毛よりも多いんだよ。・・」(231)

臆病というしつこい自己言及と同様、必要以上に自分についてアピールしている感じを受ける、数多くの窮地に陥ってきたというこの過去の告白もまた、キプリング自身の人生を思い起こさせるものである。幼い頃の両親との離別と祖母から受けた虐待、視力の低下、親友との早すぎる死別など、小さい頃から人並み以上に苦難の道を歩んだキプリングは、植民地の事情についてだけではなく、ハリー・バブと同様世の中一般の厳しさについても熟知しているのだ。見た目が冴えないこと、教養の豊かさ、臆病という自意識、そして世の中の厳しさを誰よりも認識しているという自覚など、キプリングとハリー・バブの共通点は多い。

さらに、アングロインディアン社会のヒエラルキーで下位に属するはずの人物が、帝国の先兵キムを凌ぐ能力を示し、キムの視点からは白人よりも上に位置するという転倒が何故起こっているのかという問題についても、キプリング自身の置かれてきた状況に対応させて考えることが可能だ。その集団の価値基準で下位に属するはずの人物に特異な力が付与されるということは、実は、キプリング自身が体験していたことなのである。まず、ユナイテッド・サーヴィシズ・カレッジ時代には、勇氣、行動力、男らしさが高く評価される校風の中で、そういう資質とはかけ離れていたキプリングであるが、何故か皆に尊重されていた¹⁷⁾。そしてま

た、帝国の一員としてキプリングは生涯を通じ、言葉だけ達者で行動力のない知性人への侮蔑という帝国主義的価値観を強く共有しながらも、自分は言葉を生業とする作家として帝国の中で優遇されるという立場にあった。臆病な人物が、勇氣と行動力が賞揚される帝国の中で、重責を担ってしまう。そういうキプリング自身が置かれてきた矛盾した立場をハリー・バブに重ね合わせているようである。

こう見てくると、作者の『キム』におけるポジションがハリー・バブに極めて近いように思われてくるのだが、そのことのもつ意味について、『キム』以降顕著になってくるキプリングの分裂したパーソナリティという観点からもう少し検討を加えてみたい。

4. キプリングの変装

E.ウィルソンは、キプリングが、いよいよ帝国に加担する存在となっていたことを嘆く一方で、中期以降のキプリングの芸術的發展も高く評価しているが¹⁸⁾、帝国のイデオログとしてのキプリングと、後の小説家達にも影響を及ぼすような実験的手法を試みた芸術家としてのキプリングの二面を、特に理論的に結びつけようとしているわけではない。しかしE.ウィルソンは「ラマの現世の超越ということが、妙な形でキプリングのその後の作品に入ってきている」¹⁹⁾とし、現世を越えようとするラマというキャラクターの存在と、キプリングの超自然的、神秘的な雰囲気漂う作品との関連を示唆している。それを比喩的に言いかえると、キプリングはラマを帝国の博物館に収納して完結させたのではなく、ラマの神秘的エッセンスをその後の自らの芸術にしみ込ませていくということだ。キムという帝国の英雄に協力するだけでなくラマから東洋の神秘を必死に吸収しているハリー・バブの姿が、キプリングが『キム』以降、帝国主義の価値観を唱導する保守的人物という顔だけでなく、意味が多重的で難解な芸術を追究する作家という顔も持つようになっていくことを、まさに予告していたのではないだろうか。

世俗の価値を超えた真理を追究するラマを創造したキプリングは、やがて曖昧性、多義性に満ちた神秘的な小説を多く書くようになっていく。合理的思考でとらえきれない部分、秩序の枠に収めようとしても収まらない部分を追究し扱っていくという点において、その姿勢は、ラマに教えを乞い、「俗世的な知恵の背後」つまり帝国のロジックでは捉えきれない領域に「一つ

の知恵が横たわっていることを確認」しようとするハリ・バブの姿と対応しているだろう。そしてあたかも、帝国側から見ればただの狂人にすぎないラマをハリ・バブが本気で研究していた成果を示しているかのように、キプリングは次第に、幻覚、狂気、超自然現象といったモチーフを作品に取りこんでいくことになるのである。

しかし、現実世界の強者の賛美者としてのいわばもう一人のキプリングはストーリー後半でキムを帝国の陣営に送り出す。キムのその後は、帝国の一員としての大活躍、あるいは、活躍中の華々しい死が待っているのだろう。そういうキムを創造し賛美したキプリングはやがて、帝国礼讃の詩を数多く作っていき、セシル・ローズなどの帝国主義者との交流も深めていく。その姿は、大ゲームにおいてキムに全面的に協力し、そしてその活躍を記録、報告しようとしているハリ・バブの姿勢と似通っている。「僕はデリーであのお友達に会って以来、君を尊敬しているのさ。●僕も君の名前を堂々と公式に報告するつもりだし、それは君の帽子の偉大な羽飾りになるだろうよ。」(272)

ハリ・バブから「君のことは公的に大いに推奨して報告しておくよ。じゃあご機嫌よう。」(331)と別れを告げられたキムは、「●おれも再び世の中へ出てゆかねばならぬ。」(331)と決意する。インドの自然から、帝国の秩序、規律の世界へ移行するキム。無責任なゲームから、帝国の歯車として働く責任あるポジションへ移行するキム。しかしそれは、見た目ほど大きな転向というわけではないのかもしれない。注意しておきたいのは、規律や道徳を巧妙にはぐらかしていくキムの遊戯的な能力が、大ゲームに入っていく時、つまり、大英帝国の一員として大きな役割を果たそうとする時、不可欠な能力として大いに役立つということだ。キムの持っている臨機応変の才能が大ゲームでそのまま生かされる。そのように子供時代の無責任な遊びと帝国の一員としての活躍が繋がっているという点で思い出されるのは『ストーキーと仲間達』のストーキーである。

『ストーキーと仲間達』と『キム』は、厳しい規律や自己抑制に対する強い反発を持ったヒーローが、機略を思う存分發揮して権威を茶化しながらスイスイと難局を切り抜けていくという展開が似ている。しかしこの二人の主人公のもっと興味深い共通点は、権威を茶化すためと見えた彼らの能力が、やがては帝国のために大いに役立つものとして転用されていく運命にあるということである²⁰⁾。

『ストーキーと仲間達』のビートルは、観察、記録という自分の得意とする手段で仲間達に貢献していく。そして、やがて帝国を背負っていくことになるストーキーを初めとする俊英達の、いわば準備期間である学校時代の活躍を活写する。面白いことに、三人称で語られる登場人物だったビートルが、最終章では「私」という一人称に変化している。作者が登場人物の一人に変装して物語に紛れこんでいたことが、最後に明らかにされるのだ。そもそも変装のモチーフは、『高原平話集』以来キプリングが好んで用いていたものだったが、『ストーキーと仲間達』では、いわば語りのレベルで作者自身が変装を試み始めているといえるだろう。

ヒーローの活躍の記録者としての役割を付与されているという点で、『キム』においてビートルに相当するキャラクターであるハリ・バブは、これまで見てきたようにキプリングと多くの性質を共有している。だとすると、語りのレベルでの変装をもっと思い切って試みた姿がハリ・バブであるといえるのではないか。そして、『ストーキーと仲間達』のキプリングその人だと簡単に分かるビートルが、その二年後に出版された『キム』でベンガル紳士へと姿を変えて潜伏しているのだとしたら、それはまた、作者のポジションがはっきり分かる小説を書くことが多かったキプリングが、中期以降、巧妙で捉えがたい芸術の中に身を隠してしまうことの徴候だったのではないだろうか。そういう芸術的試みによって、作者が読みを一通りに規定しようとするようなテキストではなく、逆に、多様な解釈ができるように意図的に仕組まれているテキストが生みだされてくるのだ。

インドと大英帝国そしてラマとキムの間に微妙にバランスをとって活躍するハリ・バブという特異なキャラクターと、キプリングとの意味深長な共通性に着目すれば、『キム』を帝国の側からの傲岸なインド表象という一つの解釈だけで捉えることはもはやできない。それどころか、キムが「彼がどうして色々な衣装をまったり、色々な言葉を話したりできるのか、おれには分からない」(208)と感嘆するこのインド人の変幻自在なキャラクターに、多様なパーソナリティ(インドの情報通、虐げられた者への理解者、帝国のイデオログ、モダニズムの先駆者、●●)を生きることになったキプリングが、そういう厄介な人生の舵とりをするための才能を理想的に具現化しているようにさえ思われるのである。

註

- (1) John M. Lyon, "Introduction" in *The Light That Failed* (Harmondsworth: Penguin, 1988)vii.
- (2) Rudyard Kipling, *The Light That Failed* (Harmondsworth: Penguin, 1988) 77. ディックは荒々しく振舞う反面、あたかも『キム』におけるラマの聖河探究を予兆するかのよう、時おり海や河を見やって俗世の戦いから無縁の永遠なるものへの憧れを表白している。彼は『キム』のラマとキムが別々に有している精神性と行動性を一身に背負っているようなキャラクターである。
- (3) Kipling, *The Light That Failed*, 129. ディックは、現実世界の厳しさを体験することが本物の芸術創造に必須であるということも強調しているが、キプリングの小説の主人公は、厳しい現実を勇氣と機転で見事に切り抜ける男と、厳しい現実の前に唐突に無残な死を迎える男という二タイプに極端に分かれてしまう傾向がある。最後に戦場で弾丸に撃ち抜かれる『消えた灯』のディックは後者に属し、『ストーキーと仲間たち』と『キム』のヒーローは共に前者に属す。
- (4) Isabel Quigly, "Introduction" in *The Complete Stalky & Co*, by Rudyard Kipling (Oxford University Press, Oxford, 1987)xvii.
- (5) Edward W. Said, "Introduction" in *Kim*, by Rudyard Kipling (Harmondsworth: Penguin, 1989)35.
- (6) Zohreh T. Sullivan, *Narratives of Empire: the Fictions of Rudyard Kipling*. (Cambridge University Press, Cambridge, 1993)165.
- (7) Said, 23,45.
- (8) Sullivan, 168. Sullivanは、ラマが帝国の活動に従属する結果になっていくことによってストーリー上は帝国のイデオロギーに傾斜していていることは認めている。
- (9) 例え、Edmund Wilson, "The Kipling that Nobody Read" in *Kipling's Mind and Art*, ed., Andrew Rutherford (Edinburgh and London: Oliver & Boyd, 1964). Angus Wilson, "Kim and the Stories", Irving Howe, "The Pleasures of Kim" in *Rudyard Kipling*, ed., Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1987). など。
- (10) Rudyard Kipling, *Kim* (Harmondsworth: Penguin, 1989) 以下、この作品からの引用はすべてこの版に拠り、本文中に頁数を記す。
- (11) Sullivan, 149.
- (12) E. Wilson, 30.
- (13) Lewis D. Wurgaft, *The Imperial Imagination: Magic and Myth in Kipling's India*. (Wesleyan University Press, Middletown, 1983) 26-27. イギリスの教養を身につけた中流のベンガル人というのはアングロインディアン側からは最も敵意を持たれていた。そして、臆病、嘘つきというのがベンガル紳士についてのイメージであり、『キム』のハリバブはまさにその通りに定義されている。
- (14) Wurgaft, 27.
- (15) Wurgaft, 104.
- (16) Wurgaft, 114.
- (17) ユナイテッド・サーヴィシズ・カレッジ時代のキプリングは校長のコーネルの計らいもあって、学内でもかなり存在感のある人物だった。Louis L. Cornell, *Kipling in India* (London: Macmillan, 1966)17-23.
- (18) E. Wilson, 63.
- (19) E. Wilson, 57. 後期のキプリングの場合、幻覚、狂気、超自然現象がしばしば作品に描かれるが、キプリングが取り入れることになるこういったモチーフは、しばしば男の死の後の世界に残された女達が関わっている。例えば、E. Wilsonが「後期のキプリングの作品のうち確実にこの二つが彼が書いたもので最も感動的なものの中に含まれる」といって取りあげている『メアリー・ポストゲイト』と『ガードナー』でも、唐突におとずれる男の死のあとに取り残された女達が、狂気じみた行動にとりつかれたり、超自然現象に触れたりするのである。『キム』では、サバイブできる強い男の活躍が前景化され、唐突な男の死は後景に散りばめられ、そして、男たちの厳しい戦いの現実の外部にある領域には、女性ではなくラマが存在しているのだといえよう。
- (20) Quiglyによると、『ストーキーと仲間達』は、当時の多くのパブリックスクールものの中で「学校を人生の直接の準備の場としている唯一の学園小説」である。Quigly, xv.